

【香久山】かぐやま

奈良盆地の南部、奈良県橿原市に香久山はあります。香具山・賀久山・天香山の字にもつくられます。盆地にこんもりと浮かぶ標高 152mの小山です。畝傍山・耳成山とともに大和三山に数えられ、三山は耳成山が北、畝傍山が南西、香久山が東側に位置しています。

・大和には 群山あれど とりよろふ 天の香久山 登り立ち 国見をすれば 国原は  
煙立ち立つ 海原は かまめ立ち立つ うまし国そ あきづ島 大和の国は

『万葉集』舒明天皇

国見の歌としてあまりにも有名なこの長歌は古代の香久山の意義を端的に表わしています。国見とは天皇がしかるべき場所で国を眺める儀式です。呪術性を伴う「見る」という行為により国を治める儀式です。

国見の場所が香久山なのはなぜでしょうか。それは香久山が天から降りてきた神聖な山、すなわち”天の”香久山だからなのです。その伝えは『風土記』（伊予国逸文）にあります。香久山の枕詞が「天降[あも]りつく」であるのはここに由来します。

香久山が大和朝廷にとって如何に重要な聖地であったのか、国見のみならず数々の証をあげることが出来ます。

『日本書紀』神武即位前紀によれば神武天皇は香久山の土を「倭国の物実(大和の国の本体)」とし、この土で作った祭器で祭祀を行っています。天照大神が隠れた天石窟の前での祭にも香久山の土で造った祭器が使われているのです。

武埴安彦は大和の国の本体である香久山の土を盗んで謀反を企てたというのですから、如何に香久山が重要な聖地であったかお分かりいただけると思います。『崇神天皇紀』

この他、大和三山を擬人化した恋争いの伝承があり、性別にも諸説ありますが今は略しましょう。

持統八年から三代十六年間、この地に置かれた都が藤原京です。この都はこれまでの一代ごとの都ではなく日本初の都城制に基づく恒常的な都造りでした。大和三山をも包込む大規模な都市計画であり、藤原宮をはじめ都の中心部は守られるように三山に囲まれ造営され、条里制は三山の外側にまで広がっていました。わが国の本格的都市計画は正にこの地から始まったのです。

・春過ぎて夏来るらし白妙の衣ほしたり天の香久山 『万葉集』持統天皇

香具山と聞くと多くの方はこの歌を思い出すのではないのでしょうか。

『小倉百人一首』には鎌倉時代の言葉に改定され世に知られています。

「春が過ぎ夏が来たのだなあ。真っ白い布が香具山に干してあるよ」

と初夏の日差しに照らされた白い布の眩しさが詠まれた歌です。

この歌が詠まれた場所が藤原宮としても遷都前の明日香清御原宮としても、香久山までは 1,3km から 1,7km の距離を隔てています。

当然、この距離ですと「白妙の衣」は見えても点にすぎず、歌のようにまぶしいばかりの白さは感じられないのではと疑問が生じます。

しかし、「見る」ということの意味は我々と古代人とでは異なるのです。彼らは魂の存在を信じ、「あるべき姿」を真実としてイメージする眼を持っています。この点がリアリズム芸術を経験し、眼球に映る事実を真実とする現代人とは異なるのです。

また、「春が過ぎて夏が来たのだなあ」という表現は、現代短歌の感覚からすれば説明的でくどく感じるかもしれません。しかしこの表現こそ、万葉集の天皇の歌ならではの表現なのです。先ほど述べた国見のように天皇は国土を治め、そして季節の移りを詠むことにより時を支配するのです。歌は国土と時を治める力があったのです。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~